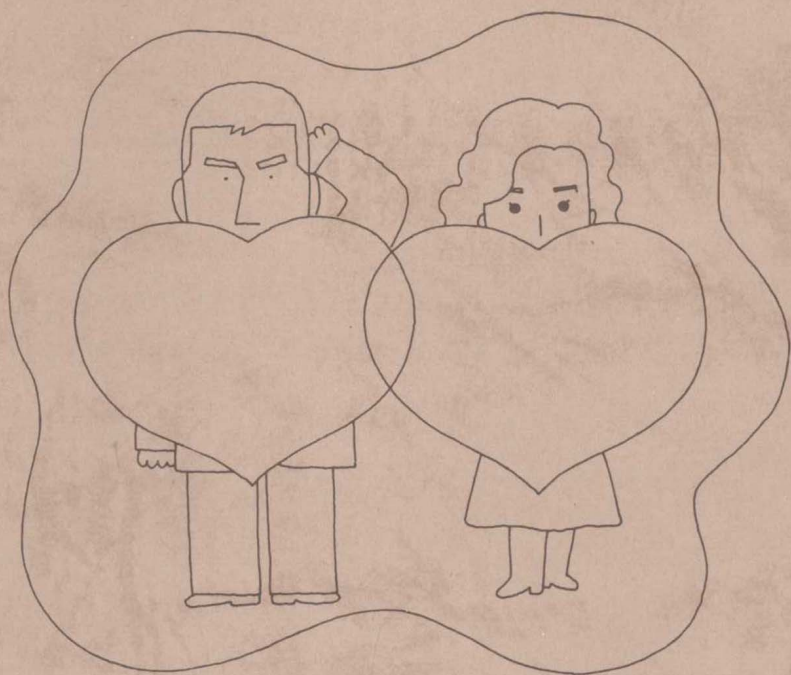




オレの愛するアタシ

筒井広志

新潮社

オレの愛するアタシ

一九八二年二月一日印刷

一九八二年二月五日発行

著者 筒井広志

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八

電話（業務部）03—二六六—五一一

（編集部）03—二六六—五四一一

印刷 二光印刷株式会社

製本 株式会社大進堂

定価九五〇円



©1982 Hiroshi Tsutsui

Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

△目次△

プロローグ	5
1 恋人の部屋	7
2 四月四日はオカマの節句	56
3 アタシを大切にして頂戴	97
4 結婚狂騒曲	140
5 こんにちは赤ちゃん、オレがママよ	180
エピローグ	215
蛇足	219

装帧——高橋春男

オレの愛するアタシ

——SF風、誇大妄想狂的、ポルノまがいの純愛物語

この物語が四月一日の夜から始められることと、エープリル・フールとは、何の関係もありません。念の為……。

ブローグ

お互いに愛し合っていて、三年間も交際^{つぎあ}っていながら、しかも一度もベッドを共にしたことのない一組の男女がいた。一九八〇年代のことだ。嘘でも何でもない。

幾千億、いや幾千兆、いや幾千兆の幾千兆倍の、つまり無数の生命、非生命、それとその中間的存在に充ち充ちている宇宙に遍在している“偉大なる意志”がいた。これを人は『神』と呼ぶ。いや、或る者は『自然』と呼び、又或る者は『奇跡』と呼ぶ。エホバとかアラとか固有名詞を付けて呼ぶ者もいる。

どう呼ばれようとも、“彼”は全知全能であった。光速 $C \parallel 2.997930 \times 10^{10} \text{ cm/sec}$ 及び、万有引力定数 $X \parallel 6.673 \times 10^{-8} \text{ dyne} \cdot \text{cm}^2/\text{g}^2$ 及び、量子力学の基本である作用量子を表すプランツの定数 $h \parallel 6.62619 \times 10^{-27} \text{ erg} \cdot \text{sec}$ などを決定し、その法則によって宇宙を支配している“偉大なる意志”である。これも嘘じゃあない。だから宇宙は存在するのだ。

“彼”が或る時、ふと、その幾千兆の幾千兆、ビットと云う気の遠くなるくらい膨大な知識の中の、殆ど零に等しいほどの僅かな部分で、ほんの一瞬、信じ難いほどの低次元の事柄について、

気まぐれな関心を抱いた。

プラトニックな恋を三年も続けている一組の男女に対してである。

『神』が一組の男女に？　嘘ォー！　でも嘘じゃない。本当なのだ。理由？　理由なんぞない。唯の偶然だ。宝くじに当たるより、もっともって確率の低い偶然だ。幾千兆の幾千兆倍分の一の確率の偶然だ。

新宿と云う街があつた。

無数の光の粒子、その各々の一粒ずつも又幾千億の光の粒子から成り立っていた。そしてその一粒も又、幾つかの惑星と云う天体を従えていた。その一粒が“地球”と呼ばれていた。『新宿』はその惑星の上の一点にあつた。

新宿——若者の街である。

一組の男女が、アルコール合成液体を飲みながら会話をしていた。生命体特有の“個性的意識”と云う現象がみられた。二つの個性的意識は、善意と幸福感で充たされていた。

“偉大なる意志”は二人に好意を感じた。嘘じゃない。嘘じゃないが、あまりにも稀な^{まれ}ことであることは確かだ。

『神』又は『自然』又は『奇跡』又はエ、ホ、バ、ア、ラ、イ、^{ほとけ}仏と呼ばれるこの“偉大なる意志”は二人の男女に好意を持った故に、ふと彼等に気まぐれな何かを与える氣になった。

新宿は、春の夜、四月一日の夜のことである。

1 恋人の部屋

爽やかな目覚めだった。

が……

へあれれ？

佐野光夫は瞬きした。天井が違うのだ。大好きなマリリン・モンローのポスターが見当たらない。そして、その代りに、天井に貼られた大きなポスターの中から、ダーバンのレインコート姿のアラン・ドロンが自分を見下ろしているではないか。

光夫は思わずベッドの上に身を起こして、辺りを見まわした。

シャーベット・グリーンのレースのカーテンから朝の陽光が柔らかくベッドの足元に揺れている。ガラス張りのサイド・テーブルの上で、ピンクの熊ちゃんの縫い包みが、トボけた丸い眼をあらぬ方に向けて、オッチャンコしている。

まぎれもなく、一條火奈子の部屋だ。

ベージュの絨毯の上に脱ぎ捨てられた儘のクリーム色のワンピースは、昨晚のデートのときに

火奈子が着ていたものだ。

「これ、いいでしょ。思い切って買っちゃったの。高価^{たか}かったのよ」

小さな白い八重歯をチラリと覗かせて、甘えるような上眼遣いで自慢していた火奈子の笑顔を、光夫は思い出した。あの表情は光夫のお気に入りのもので、火奈子もそれをよく知っているらしく、何かと云うと、あの表情を見せて、光夫を喜ばせてくれる。

布団の中で、妙なものが手に触れたのでつまみ上げてみると、ブラジャーだった。て、ことは……

光夫は少々慌て、又一方では、酷く嬉しかった。火奈っぺが、とうとう身を赦してくれた訳だ。が……記憶の中に、火奈子との情事の実感が浮かび上がってこない。そう、一片の実感もないのだ。

光夫は首を傾げた。そして、酷く損をしたような気がした。折角、長年の夢が叶ったと云うのに、その初めての夜の記憶がないなんて……。

「そんなに飲んで、大丈夫？」

水割りのお代りをやたらと注文する光夫に、カワイイ唇を尖らせて文句を云っていた火奈子の顔を思い出す。

「大丈夫じゃないさ」

そう云った自分の言葉も憶えている。

「火奈ちゃんが、ヤラセテくれないから、自棄^{やけ}酒なのだ」

「じゃ、勝手に飲みなさい」

「飲むさ。ジャカスカ飲んでやる」

いつものジャレ合いの会話が續いて、それから、新宿からタクシーを拾って……四ツ谷のアパートに火奈子を送り……阿佐ヶ谷のアパートに帰って……。

「変だな？」

光夫は再び首を傾げた。

確か、あれからシャワーを浴びて、自分で布団を敷いて寝た筈だ。それが、どうしてここにいるんだろう。

とにかく、この部屋にいるってことは、あれから再び起き出して、ここ、四ツ谷の火奈子のアパートまでやって来たって訳だ。が、全く憶えていない。それにしても、火奈っぺの奴、よく部屋に入れてくれたもんだな。光夫は不思議な気がした。

ここに送って来たとき、例によって、「ねえ、何もしないからさ、ちよいとだけ部屋に入れてよ」と、云った光夫に、「ダーメ」と、火奈子が云ったのも憶えているのだ。

「ヤラセロ」

「ダーメ」

「オレはね、とっても思い遣りがあるからさ、火奈ちゃんがイヤだって云ったら、途中でやめてもいい。だからさ、ためにやろうよ」

「何を莫迦なこと云ってるのよ。早くお帰りなさい」

「イヤだ」

「こっちもイヤよ」

「もう三年も交際^{つきあ}ってるんじゃないか。そろそろいいじゃないか」

「ダメ」

「ケチ！」

「そうよ。あたしケチンボだもん」

押し問答の末に追い返されたのだ。それなのに、今、ここに、火奈子のベッドの上にいるのだ。佐野光夫、三十二歳、作曲家である。主な仕事は、宝塚やら日劇やらコマ劇場などのレヴューショウの作曲、それにTVのマンガやらドラマの音楽、CMソング、レコードのアレンジなどを手掛けている、まあまあ売れっ子の作曲家だ。歌謡曲のヒットはない。元来が、あまり歌謡曲に向いていないらしい、と自分でも自覚している。

音楽学校出身ではなく、慶応大学法学部を卒業した後、学生時代の趣味が職業になってしまったと云う、いわゆるカワリ種である。青山に仲間と二人で『現代音楽企画』なる小さな事務所を構えている。マネージャー一人、それにデスクの女の子、経理のおじさん、この三人が社員の全て。光夫と、もう一人の仲間である大林^{むさ}夢星が、オーナーであり、専属作曲家であり、雑用係である。一応、肩書きだけは、大林夢星が社長で、光夫は専務取締役ではあるが、まあ、屋台のオデン屋のオヤジさんだって「社長」なのだから、似たようなものだ。

そして、一條火奈子は光夫の恋人である。

二十四歳の、この一條火奈子は、作詞家である。長野県の或る短大の出身で、二十歳はたちの時に小説家を志して上京し、四ツ谷にあるブティックの事務員をやりながら、せっせと売れない小説を書き続けていたが、ほんの気まぐれで応募してみた詞が、或るレコード会社で入選し、それが切っ掛けとなって、現在では作詞家として生活している。

三年前、インスタント・コーヒーのCMの作詞をした折に光夫と知り合い、以後、ずっと交際している。

周囲からも「恋人同士」と見なされているし、本人達も一応はそれを甘受しているが、実際のところは「お友達」の域を出ていないと云うのが本当である。

閑さえあれば、年がら年中デートをし、仕事の都合で逢えない時も、一日に一度は電話をしてジャレ合っているのだが、どう云う訳か、それ以上にはなっていない。

「結婚するまではダメ」

と、火奈子は古いのだ。

酒を飲めば、結構、ワイ談などを平気で聴きながらキャッキヤと笑っているのです、或る時、光夫がエロ写真を見せると、顔を耳朶まで赧らめて、プイと横を向き、「処女に向って失礼よ！」と、喚き、揚句の果には泣き出してしまった。

そして、そんなところに、光夫は惚れてしまったのである。もう、それこそ、カッカと惚れているのだ。

「火奈ちゃんはオレのものだ！」

光夫は火奈子にも自分自身にも、そう喚き続けている。そして、もう三年も続いているのである。

へそれにしても……

と、光夫は部屋の中を見まわした。

へ火奈っぺはどこに行ったんだろう

買った物にでも行ったのかな、そんなことを考えながら、光夫はベッドから下りて、如何にも女の子の部屋らしい、造花やら水森亜土のネコのイラストなどで飾られた部屋の中を見まわした。

へ何か妙だな……

何が妙なのか解らない。が、何だか、妙な感覚を覚えて、光夫は再度首を傾げた。

昨夜、あれだけ飲んだのに、宿酔ちよひよいの頭痛が、まるでない。が……妙な感覚はそれだけではなかった。

へ何だろう？

確かにいつもと異う……何かこう……何だろうな……と、光夫は考え込んだ。が、直ぐに、

へま、いいや

光夫は面倒臭くなって、考えるのをよしてしまった。そして、主のいぬ間に少々部屋を探検してやれ、と思い立ち、先ず、手近かにあった机の引き出しを開けた。引き出しの中はきちんと整頓されている。原稿用紙、エンピツ、消しゴム、豆字典などがきちんと収められ……へん！、光夫はそこにピンクの表紙の日記帳を見付けて、思わず手に取った。

ちよいとした良心の呵責も、覗き見に対する強烈な誘惑の前には脆くも押しやられてしまった。

——四月一日、晴——

へおや、昨日のだ

——光夫さんとデート。楽しかった。でもあんなに飲んじゃいけないわ。光夫さんの健康が心配。そろそろ、処女をあげちゃおうかしら……でも、やつぱり、今夜も光夫さんを部屋には入れなかった。ゴメンね——。

てことは、火奈っぺの奴、昨夜オレを追い返した後、この日記を書いたって訳だ。そうして、その後……この部屋に來たオレの強引さに負けたって訳だな……光夫はニンマリとした。

日記帳をパラパラと捲くってみる。どのページにも、必ず一箇所に、「光夫さん」と云う文字が書かれている。

へ余は満足じゃ

日記帳を元通りに引き出しに収め、部屋を見まわし、ふと、ハトポツポの掛け時計を見上げた。光夫は、へありゃッ、もうこんな時間か——と、慌てた。十時をまわっている。

夕方までに、CMソングのメロディーのスケッチを仕上げなければならぬのだ。

そのとき初めて、光夫は、自分が火奈子のピンクのパジャマを着ているのに気付いて、思わず苦笑した。

とにかく、火奈子の帰りを待つことにし、ベッドに腰を下ろした。タバコを喫おうと思って辺りを見まわす。タバコはない。

そうだ、洋服のポケットにある筈だ、と思い付き、洋服を探した。が、見当たらない。

へどこに脱いだんだ」

一DKのダイニングの端に、火奈子の洋服箆が目に付いた。あの中に仕舞ったんだろう、光夫はベッドから立ち上がった。

そして又……何故か解らないが、再び例の妙な感覚を覚え、光夫は暫し立ち止まって首を傾げた。が、結局のところ、何が妙なのか解らない。

時間も気になった。火奈子には置き手紙でも残しておこう、光夫はそう思い立ち、とにかく、洋服を探すことにした。まず、洋服箆に間違いない。

光夫は部屋を横切り洋服箆の前に立ち、そして……「あっ！」
開いた扉の中に、火奈子がいた。

火奈子も又、「あっ！」と、声を上げ、驚愕した表情で光夫を凝視している。

「火奈ちゃん！」

と、光夫が……いや、火奈子が……いや、火奈子の声が……いや、やはり、光夫が叫んだ筈なのに……「火奈ちゃん！」

再び火奈子の声が叫んだ。

「そんな莫迦な！」

これも又、火奈子の声だった。

光夫は口を噤んで、じっと、目の前の火奈子を見詰めた。火奈子も又、じっと光夫を見詰めて